

機関番号：32644

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820040

研究課題名（和文） 「ロマネスク期床モザイク研究 — 「ロマネスク」再考の試み」

研究課題名（英文） The Romanesque Floor Mosaics -Reconsiderations on "Romanesque"

研究代表者

金沢 百枝 (KANAZAWA MOMOE)

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：10548001

研究成果の概要（和文）：地中海地域の床モザイク、とくにイタリアとイスラエルの実地調査を行い、文献収集等を含めた床モザイクのカタログ化を試みた。予想以上に既存研究が多く、分析には研究規模の拡大が必須とわかった。今後、共同研究の道を探る。オトラント大聖堂の床モザイクの調査も並行して行った。実地調査から、テッセラの色合いや様式はプーリア地方のモザイクと、そして図像学的にはアドリア海沿岸部の作例と高い共通性があった。

研究成果の概要（英文）：The Romanesque style is said to be the first universal style in Europe. From my previous research on the Tapestry of Creation in Girona, Spain, I observed a significant change in the form and the choice of motives in the images of eleventh to twelfth century Europe. Such dramatic change are said to happen in Gothic period, as Panofsky discussed in his notorious essay. So called Twelfth Century Renaissance is said to be inspired by the translations of Arabic Ancient Greek texts into Latin. However, this notion seems to be in need of re-suspension since the symptoms of such change appear before twelfth century. In art and architecture, I observe a change already in the Romanesque period.

To gain the evidence for such change and see what is causing it, I have concentrated my research on the study of floor mosaics. As the Roman Empire falls, Byzantines, Islams, Jews and Europe, grew their own art and architecture out of the Roman tradition. Each owes heavily on the Roman Hellenistic culture. But by what extent and in what way the Romans nurtured their offsprings in different culture? To solve this, I focused my project on floor mosaics in mediterranean area. If all the floor mosaics in ex-Roman empire region, of different period (from Roman era, Byzantine, Islam, Jewish, early Christian, and Romanesque), are catalogued, it must be much easier to compare and discuss the changes in technique and iconography. So, I planned to build a digital corpus on these mosaics.

Through the investigation in UK, Italy and Israel, I realized there is a bulk of papers and new findings on this topic, due to the recent archeological findings. More time and work is needed to build a corpus. Probably, a bigger project with researchers in various field, i.e. Roman, Islamic and Jewish and Byzantine, may be necessary.

To achieve the better understanding of the "Romanesque", I have tried another approach. The iconographical study of the floor mosaic in Otranto Cathedral, Apulia, Southern Italy. In the floor mosaic of Otranto, we can find non-christian images, such as Alexander the Great flying with griffins, King Arthur, various monsters and a chess board. Through the survey in Apulia, the mosaic in Otranto Cathedral seems to have a close connection with those in Bari, Bitonto, Brindisi in technique and the type of tesserae used, but different from those in S. Nicola on Tremiti Islands. Iconographically, some of the motives, especially, non-Christian images seems to be in common with the floor mosaics in the Adriatic regions, such as Murano, Ravenna, or Pesaro. More study is needed to conclude.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,020,000	306,000	1,326,000
2010年度	920,000	276,000	1,196,000
年度			
年度			
総計	1,940,000	582,000	2,522,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：ロマネスク、床モザイク、中世、オトラント、キリスト教美術

1. 研究開始当初の背景

報告者は、ジローナの《天地創造の刺繍布》に関するこれまでの研究を通して、ロマネスク期の図像に大きな変換期があることを見いだした。パノフスキーやマールをはじめ、従来の研究ではパラダイムの変換は12世紀後半、ゴシック期に起きたと考えられていた。しかし、いわゆる「12世紀ルネサンス」の概念も、近年、問い直されはじめている。報告者が見いだした、図像におけるパラダイムの変革は、12世紀後半のゴシック期に先立つロマネスク期（11世紀から12世紀はじめ）である。それまで、定型をもたない形態が、統一性をもちはじめ、形が定まるのである。描方は奔放なのだが、「○○はこういう姿」というイメージの共通認識がヨーロッパ全体で共有されて、同じイメージが北欧から南イタリアまで散見されるのである。

それは聖堂装飾において顕著で、それまで幾何学や植物文様で装飾されていた教会堂が、11世紀頃から人像や動物、物語場面などで飾られるようになる。なかには、キリスト教の文脈とは異なる民話、神話、伝説など非キリスト教的なモチーフも含まれる。装飾のレパートリーが増大するのである。

こうした変化はなぜ起こったのか。これまでの研究では、12世紀後半にスコラ学の隆盛や古代哲学文献のアラビア語からの翻訳が刺激になってパラダイムの変換が起こったとされてきたが、美術や建築においては、そうした変化の兆しは、12世紀以前にすでに表れている。近年、建築史の分野でも「ロマネスク」という用語とその用法を問い直す動きが欧州各国だが、図像の定型化とその国際化という問題はいまだ未踏の分野である。ロマネスク期に起こった図像の変革という現象について、詳細に検討することはきわめて意義深い。ヨーロッパ社会誕生の様相を知るためにも、変化がいつどのようにして起こったのか再考する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、ヨーロッパ初の共通様式とされる「ロマネスク」の再考を究極的な目的とする。11世紀から12世紀に見られる図像の定型化や主題の増大といった現象を再検討する。そのためには、「ロマネスク」（ローマ風の意）の誕生に多大な影響があったと思われる古代ローマとの関係性を詳細に検討する必要がある。古代から何を引き継いだのか、その継続性を明確に規定しない限りは、その革新性の在処も把握できないからである。

当然のことながら、古代ローマ文化の影響を受けたのは、西ヨーロッパばかりではない。ビザンツ帝国はローマ帝国の継承者と自任し、ユダヤやイスラームでも美術や建築にその影響は少なくない。

そこで、本研究では、二つのアプローチでこの問題に取り組んだ。ひとつは、ローマ帝国の版図においてローマの遺産がどのように継承され、変容したのか、その変化の度合いや時期はどのように違っていたのか探る巨視的な視点でのアプローチである。もうひとつは、ヨーロッパの一つの教会堂の美術を通して、この問題を見直すミクロな視点からのアプローチである。

マクロとミクロ、二つの視点を並行的に進めることによって、「ロマネスク」という時代をあらゆる角度から見直すことが可能になる。

3. 研究の方法

そこで、本研究では、ロマネスク期の美術や建築のうち、とくに床モザイクに研究対象を絞って研究を行った。なぜならば、建物が崩壊しても、床部は残りやすく、建築が廃墟となって消え去っても、床のみが発掘されることは少なくない。ローマ帝国の版図に数多くの床モザイクが残り、とくに近年、経済活動の活発になった中東や小アジアの砂漠地帯

での新発見が相次いでいる。また、新しい建物を古い建物の上に建てる場合でも、床部分のモザイクはあえて破壊されず、現存の建物の下に埋もれている場合がある。ヨーロッパの教会堂建築では、同じ場所で改築された例が多い。近年、考古学の分野で、こうした宗教的施設の地下部の調査が進み、ヨーロッパでも新しい床下から、初期キリスト教時代からロマネスク期までの古い床モザイクが発見、修復、保護されている。

つまり、古代から中世まで時代の幅があり、また旧ローマ帝国の版図全体に作例をみつけることができる床モザイクは、古代ローマからの連続性と中世の変革を探る上で、最適な調査対象なのである。

しかも、この地域は、ローマ帝国の崩壊後、ビザンツ帝国、イスラーム圏、あるいはヨーロッパ諸国として、文化が多様化した。それゆえ、床モザイクには、古代ローマ時代の美術を受け継ぎながらも、変容するヨーロッパの現象を、イスラームやユダヤと比較することが可能になる。古代から中世など時代や地域が異なるモザイクを、技法、画像選択、画像プログラムなどさまざまなレベルで比較することによって、ロマネスクの特異性が浮彫になるだろう。

デジタル・アーカイヴを作成し、現存モザイクの情報を確認、比較、検討することは、他の研究にとっても便利なツールとなることは間違いない。

本研究では、第一に、地中海地域にあるすべてのモザイクの所在地を確認、それらの画像を収集すべく、文献調査、実地調査を行った。最終的には、データベースの形で、全時代、地中海全域のモザイクをカタログ化し、時代や地域による変異を浮かび上がらせようと考えている。

第二に、作品研究については、南イタリア、オトラント大聖堂の身廊他を覆う床モザイクの画像学的解析も進行中である。

4. 研究成果

具体的には以下のような調査を行った。

(1) ローマ時代のモザイクについて
この時代については、すでに考古学調査が綿密に行われており、地域によってはすでにカタログも存在する。既存研究が多い。しかし、日本の図書館には所蔵がないので、報告者は、ロンドン大学附属古代学研究所で調査を行い、床モザイクについての研究について書誌を制作した。自ら購入するには膨大な量の文献であり、今後、さらなる整理が必要と思われる。

(2) ユダヤ教関連施設の床モザイクについて
イスラエルのシナゴグ、宮殿、初期キリスト教時代のモザイク関連の文献を収集し

た。これについても、90年代以降、テル・アビブ近郊で古代ローマ時代のヴィッラ跡やシナゴグのモザイクなどの発見が続いている。ガリラヤ地方周辺の遺跡についてはテルレヘシュ発掘調査団（立教大学／天理大学）の協力を得て、実地調査を行った。また、エリコのヒシャーム宮殿の床モザイクも見学した。他のイスラーム圏に残る床モザイクについては今後の課題としたい。

(3) ヨーロッパ中世の床モザイクについて
これについても新しい発見が相次いでいる。現存する教会堂の地下部は、宗教的・実用上の理由から、それまで調査されることのなかったが、90年代以降、各地で盛んに行われているからである。多くは断片にすぎないが、イタリア、フランスでとくにその発掘、調査、保存が進んでいる。

イタリアでは主にイタリア中世のモザイクについて AISCOM (Associazione Italiana per lo Studio e la Conservazione del Mosaico) という学術機関から一年に一冊のペースで刊行が進んでいる。それらも日本には所蔵がないため、本研究費で仲介業者からの購入を試みたが、海外送金などの問題で入手不能であった。直接学会に問い合わせたところ、国際送金を行えば購入可能であったため、自費で購入した。

また、調査に行ったロンドン大学で、中世のモザイクについての研究所の刊行がドイツ、フランス、イギリスで予定されているとの情報も得た。

予想以上に研究対象の数が多く、文献も膨大であることが、研究に着手してみて初めてわかった。現在、リスト化やデジタル・アーカイヴの作成には至っていないが、作成への第一歩となる文献収集と実地調査は可能な限り進めており、その方法は確立できた。今後は他の領域の研究者と連携をとりつつ、研究を進め、新プロジェクトの立ち上げも計画中である。

(4) オトラント大聖堂の床モザイクについて：その画像プログラムの解析

撮影について：オトラント大聖堂については2009年に現地調査を行った。しかし、8月が祭日期間のため床モザイクには可動式の椅子が設置された状態であった。現在、オトラント大聖堂の司教座に特別な撮影許可を申請中だが、前回の調査後、椅子が可動式の椅子から、木製長椅子に改装され、椅子なしのモザイクの実見・撮影が以前よりむずかしくなってしまった。移動するとモザイクに傷がつくとのことから、椅子の移動に難色を示しているのである。

そこで、目下のところ、改装以前に撮影したフィルムを借用し、研究のために用いている（法政大学・陣内智則先生、清泉女子大学・高野禎子先生に謝意を評します）。

画像プログラムについて：画像プログラムの解読作業も進行中である。画像については、アレキサンダー大王、アーサー王とともに、チェス板や象の表象など非キリスト教的要素が、アドリア海岸域の他のモザイク（ペーザロ、ムラーノ、ラヴェンナなど）と共通することがわかった。今後は、上述のようなモザイク画像のカタログ化を通して、アドリア海沿い以外ではどうなのか、考察してゆきたい。

また、単純に画像を比較する従来の研究方法から離れて、その受容法を人体に対する画像の大きさなどから考え直したいと考えている。従来の研究で言及されていないが、オトラントのモザイクはテッセラが大きめで、各画像が人体に比して大きいという特徴がある。つまり、脚立など高い位置に立たないと各画像をカメラにおさめることさえ難しい。全体図の把握はなおさらである。中世の人々がどのようにしてこの画像を把握・受容していたのかという新しい問題が浮かびあがってきた。9月の実地調査では、歩数など、「見る速度」や「目の高さ」などを考慮しつつ、丁寧に実見したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔その他〕

ホームページ等

『芸術新潮』7月号「イスラエル・モザイク紀行」80頁～91頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金沢 百枝 (KANAZAWA MOMOE)

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：10548001

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし